慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	初めてマクロ経済学を学ぶ人のために
Sub Title	A reading list for beginners in macroeconomics
Author	細田, 衛士
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1994
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.87, No.1 (1994. 4) ,p.20- 23
JaLC DOI	10.14991/001.19940401-0020
Abstract	
Notes	読書案内
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19940401-0020

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」87巻1号（1994年4月）

読書案内

初めてマクロ経済学を学ぶ人のために

細田衛士

どんな学問領域でも，勉学を志そうとするとき，その文献の多さに圧倒され，立ち尽くしてしまうことがある。マクロ経済学の分野でも進歩が著しいため，的確な文献を選び出すことはやさしいことではない。そのようなとき，文献の水先案内があれば，どんなにか勉学もしやすいことであろう。

本号では，福岡正夫名誉教授をお招きして，マクロ経済学の新しい展開について伺った。そのインタビューのあとには参考文献が付されている。マクロ経済学を本格的に勉強したいと思っている人は，その参考文献を手がかりに勉学を進めてゆくのが賢明であろう。

本稿では，マクロ経済学を初めて学ぶ学部の1年生，また，マクロ経済学を復習したいと思っている人々に，推薦できる文献をいくつかあげたいと思う。初学者のための文献ということで，ここでは日本語で出版され，比較的手に入りやすいテキストブックを中心に紹介する

内外で定評のあるテキストのひとつに，**R.J.ゴードン『マクロエコノミクス』上・下，永井進訳，多賀出版1992**（R.J. Gordon, *Macroeconomics*, 4th edition, Little, Brown and Company 1986），がある。本書は，ケインジアンの立場から書かれた良書である。理論・実証に関して，かなり深く掘り下げた内容が述べられており，平易な言葉で最新の流れが展開されている。また，現実経済の例がふんだんに盛り込まれていて，読んでいてあきることがない。本文中で数学はほとんど用いられておらず，数学をいとわない読者には付録が用意されていて，そこである程度の数学的展開にふれることができる。

この本とならんで定評があるのが，**ドーンブッシュ・フィッシャー『マクロ経済学』上・下，廣松毅訳，マグロウヒル1993**（R.Dornbusch & S.Fischer, *Macroeconomics*, 4th edition, McGraw-Hill 1987），である。本書もIS・LM，総需要・総供給分析が中心となっているという意味では，ケインジアンの立場から書かれたテキストと言えよう。しかし，ゴードンほどケインジアンとしての立場を打ち出しておらず，マネタリズム，マクロ・ラショナリスト（新しい古典派）の立場もかなり中立

的に紹介している。やはり，新しいマクロ経済学の流れを数学をほとんど用いず，図や言葉によって説明している。それでいて，厳密さをなるべく失わないような配慮がほどこされている。また具体的な例も多くとり入れられている。

ケインジアン，マクロラショナリストどちらにもあまり偏らずマクロ経済学のエッセンスをわかりやすく説明したテキストに，**浅子・加納・倉沢『マクロ経済学』，新世社1993**，がある。この本も初めてマクロ経済学を学ぶ者には薦められる。

以上あげたテキストのどれかをきっちり学べば，マクロ経済学の基礎知識はかなり得られるのではないだろうか。また，英語で書かれたテキストは原書で読んでみるのもよい。邦訳では味わえない面白みを，そこに見いだすであろう。

現在のマクロ経済学は，ケインジアンとマクロラショナリスト（新しい古典派）の対立はあるものの，お互いが影響しあって新しい流れをつくりあげている。したがって，ことさら2つの学派の違いのみを強調するのは正しくないであろう。現実に，上にあげた3つのテキストともにケインズ経済学のみではなく，新しい古典派の理論内容も丁寧に説明している。

しかしそうは言っても，やはり考え方の相違はテキストにも反映する。この点を考慮すると，マクロ・ラショナリストによって書かれたテキストを読んでみるのも面白いであろう。その代表的なものとして，**R.J.バロー『マクロ経済学』，谷内満訳，多賀出版1990**（R.J. Barro, *Macroeconomics*, 1st edition, John Wiley & Sons, Inc. 1984），があげられる。本書を読むと，ミクロ経済学のテキストを読んでいるような気さえしてくる。個人や企業の最大化行動から解き起こされており，価格による需給調整メカニズムが強調されている。IS・LMのような用具は，ほんのわずかな箇所でふられているにすぎない。新しい古典派の考え方を学ぶ入門書としては，本書は最適である。

本書と軌を一にして書かれたテキストとして，**新保生二編『ゼミナール・マクロ経済学入門』，日本経済新聞社1991**，がある。本書は，日本人の手になる，新しい古典派の立場から書かれた数少ないテキストのひとつである。理論的内容はバローのテキストとよく似ているが，理論と現実の対応をよく考えて書かれている。日本の経済事例をとりあげて説明している点が大きな長所である。やはり我々は，「FRB」や「ドル」で説明されるよりも，「日本銀行」や「円」で説明された方がピンと来るのである。そして，このことは，特に経済学に慣れていない学生には重要なことなのである。その意味で，本書は薦められる。

さて，上にあげたようなテキストは一応終えて，現実の問題をマクロ経済学がどのように料理するのかもう少し見てみたいという人も多いであろう。そのような人には，**浜田宏一・黒坂佳央『マクロ経済学と日本経済』，日本評論社1985**，が薦められる。マクロ経済の理論を学び始めたとき，「どうも現実離れしている」という印象をもつ人も少なくない。そのような人には，本書はうってつけの本である。但し経済成長の話しが初めにあるので多少とまどうかもしれない。しかし，全体的に決してむずかしい話しをならべたてているのではないし，話題が現実的なものばかりであるか

ら，上にあげた程度のテキストを終えた人には十分読むことができると思われる。

同じような視点から書かれたものに，**吉田和男『マクロから見た日本経済』，日本評論社1989，**がある。本書の特徴は，戦後日本の経済の発展と成長の過程を，マクロ経済学を用いて分析，解読しているという点である。したがって，戦後の日本の経済の動きを学ぶと同時に，マクロ経済学の復習をすることになる。本書も，前掲書（浜田・黒坂）の場合と同様，ゴードン，ドーンブッシュ・フィッシャーなどの初級テキストを終えた後に読むのが良いであろう。

初級のテキストではあきたらず，理論的にもう少し先に進みたいと思う人には，次の２冊が薦められる。**佐藤和夫『マクロ経済学専科』，日本評論社1991，足立英之『マクロ動学の理論』，有斐閣1994**。これらのテキストは，ともにマクロ経済学の理論をやや詳しく説明してある。前者（佐藤）のテキストは，語り口はやわらかいが，重要な話題を極めて簡潔に述べてあるので，読むときには若干の注意が必要である。わからない箇所がある場合には，他のテキスト，文献にあたることが必要であろう。また両方のテキストともに多くの数式が用いられており，ある程度の数学的知識が必要である。

また，ケインズ経済学のミクロ的基礎を学びたいと思う読者には，**根岸隆『ケインズ経済学のミクロ理論』，日本経済新聞社1980**，が薦められる。良く知られているように，ケインズ経済学は数量調整によって均衡が達成される経済を想定している。しかし，数量調整はどのようなミクロ的な行動原理によって説明されるのであろうか。本書は，この問題をわかりやすく読者に解説している。

以上あげたようなテキストを読んだ人々には更にどのような文献が薦められるであろうか。本号インタビューに付された本格的文献に挑戦してみるのも良いだろう。特に，理論面に興味のある読者は，この精選された文献から読み始める事によって，多くの収穫があるはずである。しかし，現実経済とのかかわりにおいて，マクロ経済学の知識を幅広いものとしたいと望む人々には，以下のような文献が良いかもしれない。**アラン・ブラインダー『ハードヘッド＆ソフトハート』，佐和隆光訳，ＴＢＳブリタニカ1988**（A.S. Blinder, *Hard Heads, Soft Hearts*, Addison-Wesley Publishing Company Inc. 1987)。著者であるブランンダーはケインジアンの理論家であり，数多くのすぐれた業績を残してきた。著者は，アメリカ経済の諸問題をとりあげ，経済学，特にマクロ経済学をもって解明している。本書は一般向けに書かれた本であり，数式は一切用いられていない。しかし，マクロ経済学のエッセンスがあらゆるところにちりばめられており，息を抜いて読むことはできない。経済学的な物の見方がいかに重要か教えられる本である。

もう１冊，ケインジアンの巨匠によって書かれた本をあげておこう。**ジェイムス・トービン『マクロ経済学の再検討』，浜田宏一・藪下史郎訳，日本経済新聞社1981**（J.Tobin, *Asset Accumulation and Economic Activity*, Basil Blackwell & Mott Ltd. 1980)。

本書において，トービンはマクロ経済学を批判的に吟味し，ケインジアンのマクロ経済学の有効性を主張している。合理的期待形成仮説の長所にも充分考慮を払っているが，一方で新しい古典派

に対しては，批判的な論陣を張っている。本書の出版（英語版）は1980年と多少古いが，しかし本質的な点は現在でも重要性を失っておらず，より多くの人々に読まれるべき本であろう。ちなみに，トービンは1981年度ノーベル経済学賞の受賞者である。

次に，新しい古典派の立場から書かれた本を紹介しよう。代表的なものは，**ロバート・ルーカスJr.『マクロ経済学のフロンティア』，清水啓典訳，東洋経済新報社1988**（R.E. Lucas, Jr., *Models of Business Cycles*, Basil Blackwell Ltd. 1987）である。ルーカスは，サージェントらとならんで，新しい古典の立役者である。新しい古典派について知りたい読者は，本書によって大体の知識を得ることができる。ルーカスは随所でケインジアンの考え方に批判を加えているが，しかし本書はケインジアンに共鳴する読者にとっても読まれるべき本である。非自発的失業とは何か，裁量とルールとの違いは一体なんなのか，日頃何気なく使う言葉にも充分検討を加えており，深く考えさせられる本である。

新しい古典派の考え方のひとつの核は，合理的期待形成仮説である。しかし，この考え方は，マクロ経済学を学ぼうとするものにとって多少むずかしいかも知れない。この仮説をわかりやすく解説したものに，**志築徹郎・武藤恭彦『合理的期待とマネタリズム』（日本経済新聞社1981）**，がある。本書は，合理的期待とマネタリズムのわかりやすい解説書で，一応マクロ経済学のテキストを読み終えたものならば，充分ついてゆけるであろう。使われている数学も，むずかしいものではない。

以上，マクロ経済学を始めて学ぶ人々を対象として，どのようなテキストを選んだら良いか，テキストを終えたあとにどのような文献を読んだら興味が湧くか，いくつかの代表的な文献をあげた。もとより，上にあげた以外にもマクロ経済学を学ぶための良書はたくさんある。しかし，ここに全てを紹介するわけには行かない。あとは，読者が自分の鼻で嗅ぎわけて，自ら良い文献を選び出して欲しい。

最後に，マクロ経済学の文献ではないが，経済学の将来を語った文献として，**J.D.ヘイ編『フューチャー・オブ・エコノミックス』，鳥居泰彦監修，同文書院インターナショナル1992**（J.D. Hey, ed. *The Future of Economics*, Basil Blackwell Ltd. 1991），をあげておこう。本書は，最も定評のある英国の経済学専門誌『エコノミック・ジャーナル』の創刊100年を記念して，世界の一流の経済学者が経済学の将来を見通して書いたエッセイ集である。経済学も日々進歩している。経済学者自身が経済学の明日をどう考えているかを知るのは興味深い。本書に対しては，色々な見方があるかも知れない。しかし，本書を読んで経済学への興味をかき立てられること，これだけは間違いないことであろう。

（経済学部教授）